

ある時、律法学者ガマリエルが言いました。「その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。」(使徒行伝 第5章38節～39節)

事の発端は使徒たちの言動にありました。これまで社会を牛耳ってきた人たちにとって、彼らの動きは脅威でした。キリストを十字架につけて殺し、やっと自分たちの支配が回復すると思っていたのに、今度はキリストの復活を宣べ伝える人たちが現れたのです。彼らは使徒たち全員を捕まえて、尋問しました。

対して、使徒たちは「この事実の証人」(5章32節)だと訴えました。証人とは、自分が見聞きした事実を述べる人のことです。彼らが述べた事実とは、主イエスが十字架について死なれたこと、3日目に復活させられたこと、今も天において生きておられるということ、それは全てあなたのためだ、ということでした。

かつてパウロは、福音のためならどんなことでもすると言いました。自分の言動は、この人のつますきにならないだろうか、いつもそれだけを考えて行動していました。何とかして幾人でも救うために、そうせずにはいられませんでした。そしてそれは、この時の使徒たちの思い、キリストの証人として立てられた私たちにも共通する思い、神から出た思いです。

先々週、ペテロの話をお聞きしました。ペテロは毎朝、鶏の鳴く声を聞く度に、深い痛みをもって自分の罪を思い起こしたでしょう。だからこそ毎朝、そんな自分を赦してくださった主の愛の深さを思い知る者として目覚めさせられ、主のご用に用いてくださる主の憐れみにひれ伏すようにして1日を始めたことでしょう。それはペテロだけではなかったはずで、使徒たちそれぞれに、今の自分に至るまでに、主と自分にしか分からない回心物語があったことでしょう。

彼らには、ある確信があったのだと思います。主なる神は人を変えることができるお方だ、と。イエス・キリストの死と復活を通してあらわされた主なる神の愛は、どんな人の心も捉え、全く新しい人に造り変えてしまう。なぜなら自分がそうだったから。今、キリストを宣べ伝える自分があるのは、自分の力によるのではない。私はといえば、神の御心を痛め続けて来た。しかし、そんな自分を諦めることなく、ご自分の

命と引き換えにしてでも赦し、愛し、造り変えてくださったのは神だった。そう我が身に実感していたからこそ、敵意に囲まれても、ひるむことがなくなってしまったのだと思います。

神の思い、聖霊に満たされるとき、私たちは自分の欠けではなく、目の前の人が自分に対してどうであるかでもなく、神がどれほどに私を、目の前の人を愛しておられるか、もうそれしか見えなくなるのでしょうか。そして、キリストを伝えずにはいられなくなる。そのためにまず、相手に信頼してもらえるように自分を変えることをいとわなくなる。それが、神から出る思い、聖霊が与える力、全てのキリスト者たちに与えられ、教会を新しく形作ってきた力です。

一方、使徒たちを殺そうと考えたサドカイ派の人たちは嫉妬に燃えていました。彼らの関心は、福音によって立ち上がりされた人々の喜びではなく、人々を救おうと行動しておられる神の御心でもなく、自分たちが信じていると思っていた聖書や神のことでさえありませんでした。そんな彼らの思いと行動こそが、神から出たものではなく、人間から出たものでした。

使徒たちは、イエスの名によって話してはならないと厳しく命じられ、鞭打たれ、釈放されました。しかし、彼らは「毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき教えたり宣べ伝えたりした。」(5章42節)鞭打たれても、一生懸命に伝えたことが通じなくても、聖霊に満たされた者がせずにはおれなくなる、あの神から出た行いは続いて行きました。

使徒行伝は、神から出たパウロの行いを伝えて終わります。「はばからず、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた。」(28章32節)

そしてこれは、未だ終わっていません。今も私たち教会を通して、この地に続けられようとしています。私たちも遣わされた場所で、聖霊の力に押し出されて、福音を宣べ伝えるためだけに生きていたい。私たちは、私たちの思いをはるかに超えた仕方で、世界中の兄弟姉妹と結び合わされて、使徒の時代から続いてきた使徒行伝の物語の中に生かされています。今週も、あなたを通して神が働かれます。神から出たものを誰も滅ぼすことはできません。その目的を果たすまで、前進し続けるのです。